

見えるようになれ

マルコ10:46～52 / 李正雨牧師

私は体が丈夫な方です。ところが、最近、少しずつ体のバランスが崩れてきていることを感じました。特に目にトラブルが生じました。以前よりも小さい字が見にくくなり、文字が小さい本や記事を読むためには、目に力を入れて読むようになりました。老眼が始まったみたいだと思います。見ることが少し不便になり、目は本当に大事なものだということが分かりました。今日の福音書は、この目に関連がある言葉です。今日の福音書には、目に障害がある、目が見えない人が登場します。そして福音書には、彼の名前はバルティマイだと書いてあります。今日の福音書46節です。「一行はエリコの町に着いた。イエスが弟子たちや大勢の群衆と一緒に、エリコを出て行こうとされたとき、ティマイの子で、バルティマイという盲人の物乞いが道端に座っていた。」ここで、バルはアラム語で子という意味であり、ティマイは人の名前です。「ティマイの子」、これは彼が当時に呼ばれていた名前のようなものでした。

一般的に子供の名前をつけるときは、いろいろ考えたり、工夫したりしますね。私も多くの工夫をして、三人の子供の名前をつけました。長男であるサンユンは「お互いに真実にしなさい」という意味です。次男のサンフは「お互いに厚くなりなさい」という意味であり、三男のサンオンは「お互いに穏やかになりなさい」という意味です。イスラエルの文化でも、子供に名をつけることは、大事に思われていました。だから、イスラエルの親たちは、子供の名前をつけるとき、神さまの御名と関連づけて作りました。例えば、エリヤの名前の意味は「私の神は、ヤハウエ」という意味です。イザヤは「ヤハウエは救い」という意味であり、ダニエルは「ヤハウエは私の裁判官」という意味です。ところが、今日の福音書に登場している人は、ただバルティマイと呼ばれています。彼にも名前はあるでしょう。しかし、聖書は彼をティマイの息子だと紹介しているだけです。

そして彼は、物乞いとして紹介されています。彼が物乞いをするようになったのは、多分体に障害があるからだだと思います。当時のユダヤ人の社会では、体に障害があることは良くないと思われていました。ヨハネによる福音書9章でも盲人の話が書かれていますが、その話を通して、私たちが知ることができるのは、障害についての人々の認識が良くなかったということです。ヨハネによる福音書9章2節にはこう書かれています。「弟子たちがイエスに尋ねた。『ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも両親ですか。』」イエスさまの弟子たちも障害の根源を罪から探していました。本当に障害について無知の時代でした。そのため、今日の福音書に登場しているバルティマイも、良くない扱いを受けながら生きていたのだと思います。しかしイエスさまは、この無名の盲人の物乞いを通して、私たちに大切な言葉を教えてくださいます。

先々週から私たちは、マルコによる福音書10章の言葉をもって分かち合っています。先々週は、イエスさまと金持ちの男との会話を通して「永遠の命とお金」についての教えを聞きました。先週は、イエスさまと弟子たちとの会話を通して、「地位と権力」についての教えを聞きました。そして今日は、マルコによる福音書10章の最後の言葉をもって、バルティマイとイエスさまの会話についての教えを学ぼうとしています。先に申し上げたように、バルティマイは盲人であり、物乞いでした。彼の都合は悪かったのですが、誰も彼に気を使ってくれませんでした。そんなバルティマイに「ナザレのイエスだ」という言葉が聞こえてきました。すると彼は、叫び始めました。47節の言葉です。「ナザレのイエスだと聞くと、叫んで、『ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください』と言い始めた。」

彼が叫んだのは、おそらく物乞いをしながら、イエスさまの奇跡の話を聞いたからだだと思います。彼は、自分のことをイエスさまに知らせるために、叫んでイエスさまを呼びました。多くの人が叱りつけて黙らせようとしたのですが、彼は叫ぶのを止めませんでした。そして彼の望み通りに、イエスさまは彼の声を聞かれ

ました。イエスさまはバルティマイを呼んで来なさいと言われました。人々はイエスさまの言葉通りバルティマイを呼び、彼は急いでイエスさまのところに行きました。50節の言葉です。「盲人は上着を脱ぎ捨て、踊り上がってイエスのところに来た。」

私は、一度この場面を想像してみました。イエスさまに呼ばれたバルティマイは、どのようにしてイエスさまのところに行ったかを考えてみました。多分目が見えないから、転んだり、イエスさまがどこにいらっしゃるかと尋ねたりしたでしょう。人目などは気にしなかったでしょう。人々が自分のことをどう見ても、自分の姿がどう見えても気にせず、彼はイエスさまのところに行きました。さらにもっと驚くべきことは、彼が上着を脱ぎ捨てて、イエスさまのところに行ったということです。物乞いにとって上着は、非常に大事なものでしょう。当時は、物乞いをして小銭を受けるとき、上着を地面に広げて受けたそうです。そしてパレスチナ地域は、昼と夜の気温の差が激しかったのです。もちろんエリコが他の地域と比べて、暖かい地域だと言っていますが、野宿することもある物乞いには、上着は絶対的に大事なものでした。ところが、イエスさまのお呼びにバルティマイは、上着を脱ぎ捨て、人目も気にせず、イエスさまのところに行きました。

私はこの場面を想像していたところ、弟子たちが呼ばれた時の場面も一緒に思い浮かびました。彼らも、イエスさまから召されたとき、すべてを捨てて、イエスさまに従いました。漁師だったペトロとアンデレは、自分たちの生業であった網を捨てて、イエスさまに従いました。ヤコブとヨハネは、自分たちの生業だけでなく、父ゼベダイも舟に残して、イエスに従ったとマルコによる福音書1章20節に書かれています。人目を気にせず、イエスさまに従ったのです。彼らだけでなく、他の弟子たちも、生業を捨てて人目を気にせず、イエスさまに従いました。ところが、先々週の福音書での彼らは「お金や財産」について敏感な反応を示しました。そして先週の福音書で彼らは、自分たちの地位について争いました。みんながイエスさまの両側に座って、人目を引くことを望んだのです。

弟子たちはイエスさまに召された時と変わっていました。イエスさまのお呼びだけによってすべてを捨てた彼らは、イエスさまの両側に座ることを要求する程度になってしまいました。イエスさまの弟子になったのが自分たちの特権であり、地位であるかのように振る舞いました。イエスさまに召される前の弟子たちのことを一度考えてみてください。彼らは無名の者でした。イエスさまの愛弟子であるペトロ、ヤコブ、ヨハネも誰々の息子だと呼ばれていました。「ヨハネの子シモン(ペトロ)、ゼベダイの子ヤコブとヨハネ」と呼ばれました。しかし、彼らは一番上になりたがり、仕えられることを望みました。

今日の福音書51節でイエスさまは、「何をしてほしいのか」とバルティマイに尋ねられます。このお尋ねは、先週の福音書でヤコブとヨハネに言われた尋ねと同じものです。このお尋ねにバルティマイは「先生、目が見えるようになりたいです」と答えました。このバルティマイの答えは、ヤコブとヨハネの答えと妙な対照をなします。自分の栄光のために、イエスさまの両側を要求した弟子たちと見ることを願っているバルティマイの姿。この言葉がマルコによる福音書10章の最後の言葉として入ったのは、弟子たちは、どんな状況になっても、真実を見なければならぬからだと思います。欲は目をくもらせません。真実を見ることができないようにさせます。だから、イエスさまの弟子である私たちは、欲に目がくらまないように、いつも気をつけなければなりません。

52節でイエスさまはバルティマイにこう言われます。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」しかし、バルティマイは、自分の道を行きませんでした。52節の後半部では、このように書かれています。「盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。」真実に目覚めた人は、自分の道に戻りません。私たちは、イエスさまに従うということが祝福を受けるため、我々の財産を守るため、この世でゆったりと暮らすためではないということが分かっています。だから、私たちも自分だけのための道には戻りません。神さまが私たちの信仰と心を守ってくださいますように。真実に目覚め、いつも楽しく、イエスさまに従う私たちになりますように、主の御名によって祈ります。アーメン